

恋とスフレと娘とわたし

2007(平成19)年9月17日 鑑賞(テアトル梅田)

★★★



監督＝マイケル・レーマン／出演＝ダイアン・キートン／マンディ・ムーア／ガブリエル・マクト／トム・エヴェレット・スコット／ローレン・グレアム／パイパー・ペラーボ／ステイーヴン・コリンズ (東北新社配給／2007年アメリカ映画／102分)

…… 3人の娘を育てあげ、還暦を迎えた主人公は今なお元気いっぱい三女の婿探しに奔走中。WEBサイトの花婿募集から始まるコメディタッチの恋模様は、娘だけではなく母親にも……。邦題と原題の大きなズレを意識しながら楽しめばいいのだが、女4人の会話の姦しさには少しうんざり……。ところで、恋愛、結婚、子育て——フルコースを終えた主人公に待っている極上のデザートとは……？

『恋愛適齢期』から4年……

1946年生まれ、したがって既に60歳の還暦を迎えたハリウッドのトップ女優ダイアン・キートンの直近の傑作が『恋愛適齢期』(03年)だった。そこでは、映画の設定上54歳の劇作家を演じるダイアン・キートンと63歳のプレイボーイの実業家を演じるジャック・ニコルソンの2人を主役として、そのタイトルどおりのすばらしいストーリーが展開されていた(『シネマルーム4』331頁参照)。それから4年……。

今回の『恋とスフレと娘とわたし』でダイアン・キートン演じる主人公ダフネは、スイーツショップを経営するパティシエ。彼女は若くして夫を亡くしながら、長女マギー(ローレン・グレアム)、次女メイ(パイパー・ペラーボ)、三女ミリー(マンディ・ムーア)の3人を立派に育て上げ、今60歳を目の前にしている母親だ。若くして恋愛を体験し、その後結婚、出産、3人の子育てを終えたダフネの現在の心配事は、三女ミリーが幸せな結婚ができるかどうかということ。長女も次女も幸せな結婚生活を営んでいるが、三女のミリーだけは、母親から料理の才能を受け継いでいるものの、なぜか男に関しては不器用。そりゃ3人も娘がいれば1人くらいはそういうタイプが

いるもの……？

夫を亡くした後一人閨房を守り、犬だけをパートナーとして生きてきたダフネが、何とかこのミリーに幸せな結婚をしてもらいたいと願ったのは当然。

さあ、『恋愛適齢期』から4年。ダイアン・キートン演ずるダフネは、そんなおせっかいな母親を魅力いっぱいに演じているが、ストーリーの行きつくところは……？そしてそれと同時に、ちゃんと自分の幸せも……？60歳の還暦を迎える彼女を待ちうける極上のデザートとは……？

女4人寄れば……

韓国のキム・ギドク監督の映画や8月30日に観た朝鮮族のチャン・リュル監督の『キムチを売る女』(05年)を観ると、セリフがほとんどないから、そんな映画の脚本は多分ペラペラ……？しかし、「女3人寄れば姦しい」と言うところ、機関銃のようにしゃべる母親とそのお仲間のような3人の娘合計4人が一緒になって遊びに行ったり買物をしていると、4人のしゃべるセリフの量だけで膨大なものだからそんな脚本のぶ厚さは……？

9月9日に観たクエンティン・タランティーノ監督の『デス・プルーフ in グラインドハウス』(07年)では、4人の若い女の子たちの延々と続くおしゃべりの描写にうんざりさせられたが、この映画でのダフネとミリーの議論(?)を中心とした丁々発止のやりとりを聞いていると、その理論的正当性を考えるより、言葉の量の多さだけで疲れてしまう感が……？

レストランでも、おしゃべりな女4人連れの隣に座ろうものなら最悪！女性客は、60歳にしてはちょっとハデすぎるのではないかと思うようなダイアン・キートンのファッションの数々も見ものだし、セックスについての本音があちこちに散りばめられた女4人のナマナマしい会話も聞いていて楽しいのかもしれないが、男性客にはうるさいだけ……？

WEBサイトで花婿募集……？

近時わが国でも「迷惑メール」(いわゆるHメール……?)に対する法的規制を強化しようという動きが急だが、毎日パソコンに大量の迷惑メールが入ってくる私としては、早くそれを実現してほしいもの。この映画の中で、三女ミリーのためにミリー

に内緒でダフネが花婿募集の広告を出したのは、WEBサイトによるもの。といっても私にはその技術的なことは全くわからないが、ダフネがそんな広告を出したことによって「水玉模様の洋服」を着た母親に面接を求めてきた男がいっぱいいることにビックリ。もっとも、その広告にダフネは「真面目な男性」と条件を限定していたのだが、応募してきた男たちはその条件と正反対の奇人変人ばかり。そりゃ、タダで広告できるWEBサイトの花婿募集ではその程度が関の山……？

そう思っていると、何と最後の最後に白馬に乗った王子サマのような理想的な男性が……。それがジェイソン（トム・エヴェレット・スコット）というエリート建築家。なぜ、こんな引く手あまたの男がダフネのWEBサイトに、とダフネが当然の質問をぶつけると、ジェイソンは「仕事に追われているうちに恋人を見つけ損なった」とのこと。なるほど、そりゃ十分ありうること。

ダフネは自分の計画がこんなにうまくいった喜びをかみしめながら、ミリーのケータリングショップの連絡先をジェイソンに渡し、あくまで「偶然の出会い」を演出してミリーとの交際を開始するよう「指示」したが……。

もう1人意外な男が……

もともとコメディタッチのこの映画を、ストーリー構成上面白くしているのは、WEBサイトによる本命の花婿候補ジェイソンの他、手にタトゥーをしているというだけでダフネがミリーにはふさわしくない男性と断定してしまった、ギター弾きの男ジョニー（ガブリエル・マクト）がミリーの花婿候補として勝手に名乗りを上げてきたこと。母親から薦められた赤の水玉模様のワンピースを着ている時、偶然（？）ジェイソンと知り合うことになったミリーはたちまち有頂天になったが、そこにさらにやさしくて面白い男性ジョニーが登場し、二股かけの恋愛ゲームを楽しむことができるようになったのだから、ミリーは申し分なし……。

というのも、ホントは変な話なのだが、実は男性との交際は不器用と思っていたミリーも意外と二股かけを器用にこなし、二人二様のセックスライフもうまく楽しんでいたようだからビックリ……。ある日ミリーがそんなジョニーの家を訪れてみると、そこにはやんちゃ盛りの一人息子とその孫と楽しそうに遊んでいる彼の父親ジョー（スティーヴン・コリンズ）の姿が。まさかミリーがこんな子連れ男と今後まともにつき合うはずはなく、これによって本命をジェイソン一本に絞るはずだと私は思った

のだが……？

二股かけの報いは当然……？

料理好きのミリーが、結婚相手となる男の味覚や料理の好みに大きな関心を持つのは当然。そんな目でジェysonとジョニーを比べてみると、常識的には誰がみてもエリート建築家のジェysonの方がお薦めだが、彼は食事の好みがイマイチ……。というより、その味覚はかなりダサそうだし、一緒にいるといつも少し窮屈……。これに対して、子持ちのギター弾きのジョニーは雰囲気も仕事もヤクザっぽい(?)が、意外とフィーリングが合い、一緒にいると心が休まりそう……。

そんな勝手な採点をしながら二股かけの交際を続けていたミリーだったが、それがバレて、「アイツとも寝ていたのか？」という露骨な質問が出るようになれば、大体それで2人の関係はジ・エンド。てなわけで、恋の絶好調時代は長くは続かず、こちらもあちらも一気にアウト。私に言わせれば、そりゃ二股かけの当然の報いだが……。

母親の方は絶好調……？

WEBサイトで花婿募集をしたのは三女ミリーのためだったはずだが、いつの頃からかダフネとジョニーの父親ジョーがいい雰囲気……。還暦を迎えようとしているダフネに対しジョーはとうに還暦を過ぎているはずだが、アメリカ人のセックスは日本人よりよほど強いらしい……。母親と娘3人の計4人の女たちが語る「オーガズム論」やその体験交流談(?)は日本人には絶対考えられない赤裸々なものだが、アメリカでは(この映画では?)そんな開けっ広げな会話が堂々と展開されるからビックリ。

さらに、多少コメディタッチながらも、『恋愛適齢期』で見せつけてくれた建物をガタガタと揺らし嬌声を流す派手なセックスに続いて、ダイアン・キートン演ずるダフネとジョーとの間の大膽なセックスシーンもところどころに……。なるほど、「恋愛、結婚、子育て——フルコースを終えた私に待っていた極上のデザート」とはこれだったのか……。母親がジョーとこんなに絶好調なら、ひょっとしてジョニーもミリーといい仲に復活するのでは……。そんな期待を込めて、ラストまで温かく三女ミリーの行く末を見守っていききたいものだが……。

邦題と原題には大きなズレが……

料理は全くわからない私だが、スフレというデザートはデリケートでつくり方が難しく、ふっくらやわらかく焼きあげるにはかなりの年季とセンスが必要らしい……？

この映画の長ったらしい邦題は、母親と娘3人の恋模様の行方をそんなスフレにたとえながら表現しようとしたもので、それなりに工夫されたもの。したがってパンフレットには東京・西麻布にあるスフレの専門店「ル・スフレ」のオーナーシェフである永井春男氏のスフレにまつわるコラムが載っているが、これはそんな邦題がつけられたおかげ……？

しかしこの映画の原題は、三女ミリーが2人の男の家で焼くスフレに着目したものではなく、母と娘の力関係に着目した(?)、『Because I Said So』。これは、娘とくに三女ミリーから何度も「Tell Me Why」と質問されるたびに、ダフネが「Because I Said So」と答えるフレーズをタイトルにしたもの。つまり、「ねえ、どうして?」と聞かれたことに対して、「どうしてもよ」「私の言ってることは絶対よ」と母親の權威をカサにきた問答無用のフレーズなのだ。このように、邦題と原題には大きなズレがあるが、あなたはどちらが好き……？

2007(平成19)年9月19日記

第5章

さわやかな初恋からドロドロの恋愛まで